

児童の社会的能力自己評定の個人差と教師評定との関係

○ 三 瀧 剛 (福岡教育大学大学院)
小泉令三 (福岡教育大学)

米山祥平 (福岡教育大学)

【問題と目的】

近年、児童の問題行動の増加・多様化に対する早期対応または予防の観点から、「社会性と情動の学習 (SEL-8S 学習プログラム)」による児童の社会的能力向上の取組が進められている (小泉, 2011)。本研究では、SEL-8S 導入の予備段階として、特定の心理教育プログラムによる介入を行わなかった場合の、児童の社会的能力自己評定の個人差と、教師評定との関係を調査した。

【方法】

調査対象者 公立小学校 2 校の 5・6 年生計 74 名
質問紙 小学生版「社会性と情動」尺度 (田中・真井・津田・田中, 2011) の児童自己評定及びこれにもとづく教師評定を用いた。本尺度は「自己への気付き」「他者への気付き」「自己のコントロール」「対人関係」「責任ある意思決定」「生活上の問題防止スキル」「人生の重要事態に対処する能力」「積極的・貢献的な奉仕活動」の 8 因子から成る。各因子は児童自己評定が 3 項目、教師評定が 1 項目から構成されている。前者が 4 件法、後者が 5 件法で回答を求めた。

調査手続き X 年 7 月に第 1 回目の調査を、同年 12 月に第 2 回目の調査を行った。

【結果と考察】

第 1 回目の児童自己評定をもとにクラスター分析を行い、児童の社会的能力の傾向を 5 つのグループに分けた。その後、児童自己評定・教師評定それぞれについて、グループ (A:5) × 時期 (B:2) × 能力 (C:8) の 3 要因による分散分析を行った。

その結果、児童自己評定においては全ての主効果及び交互作用が有意であり、教師評定においては C の主効果及び A×C, B×C の交互作用が有意であった。また、図・表のような特徴が示された。

2 次の交互作用についての検定の結果、グループ V においては、児童自己評定 4 因子 (「自己への気付き」「他者への気付き」「対人関係」「積極的・貢献的な奉仕活動」、教師評定 4 因子 (「自己への気付き」「他者への気付き」「責任ある意思決定」「積極的・貢献的な奉仕活動」) で、第 2 回目の方が有意に高かった。一方で、グループ I～IV においては、児童自己評定・教師評定共に、第 1 回目と第 2 回目の間で 4 因子以上の有意差は確認できなかった。また、児童自己評定と教師評定との間に、相関は示されなかった ($r=-0.02\sim0.30$)。しかし、児童自己評定・教師評定ともに、グループ II に関する評定が全体的に低いことと、グループ V に関する評定が因子間でばらつきがあることは共通していると言える。

第 2 回目の評価点の方が有意に高くなったのは、グループ V のみであった。さらに、グループ V の成員数は 4 名と、調査対象全児童のわずか 5% であり、特別な介入を行わなかった場合に、多くの児童の社会的能力は向上していなかった。

今後、全ての児童を対象とした一次的教育援助サービスとして、心理教育プログラムの導入による児童の変容を調査していきたい。

【付記】本研究は、(独) JST 研究開発成果実装支援プログラム「学校等における犯罪の加害・被害防止のための対人関係能力育成プログラム実装」の助成を受けた。

表 クラスター分析による児童のグループと教師評定に示された特徴

グループ毎の児童自己評定の特徴		教師評定に示された特徴
グループ I (n=22)	「自己への気付き」因子低群。8 因子平均評定が最も高い。	「対人関係」が低い。また、高評定だった児童自己評定に対して全体的に評定が低い。
グループ II (n=10)	全体的低群。8 因子平均が最も低く、8 因子全てが偏差値 50 を下回っている。	8 因子平均が最も低く、特に「他者への気付き」が低い。
グループ III (n=14)	「自己への気付き」「人生の重要事態に対処する能力」の 2 因子低群。	「意思決定」が低く「問題防止」が高い。8 因子の平均値が 5 件法で 3.05 と平均的。
グループ IV (n=24)	「自己のコントロール」因子低群。8 因子平均評定は 2 番目に高い。	8 因子全てが 5 件法で 3.00 以上、8 因子の平均値が 3.37 と、児童自己評定同様に高評定。
グループ V (n=4)	「自己のコントロール」「生活上の問題防止スキル」の 2 因子突出群。	因子間で高い評定の因子と低い評定の因子があり、ばらつきがある。

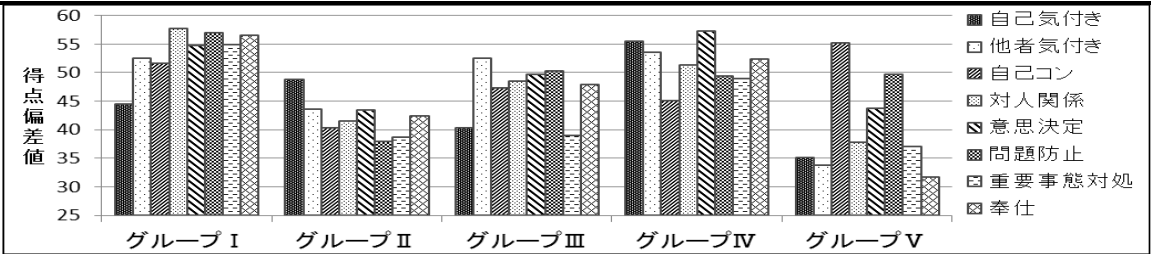


図 クラスター分析による児童のグループと 8 因子 (社会的能力) の内訳